

『モノ』・『コト』と『事象 event』について

李 長波(京都大学)

本発表は、廣松渉(1975)の研究をふまえ、「モノ」と「コト」という極めて日常的な言葉によって指し示され、意味される言語現象の実状を分析することを通じて、両者を区別することの可能性、両者を言語研究の術語として用いることの可能性を検討するものであるが、最終目標は、「事象 event」という新しい術語との関係を如何に考えるべきか、ということにある。

一、「モノ」の辞書的な定義から——岩波書店『古語辞典』(補訂版)を例として

●もの【物・者】 [名] <形があって手に触れることのできる物体をはじめとして、広く出来事一般まで、人間が対象として感知・認識しうるものすべて。コトが時間の経過とともに進行する行為をいうのが原義であるに対して、モノは推移変動の観念を含まない。むしろ、変動のない対象の意から転じて、既定の事実、避けがたいさだめ、不変の慣習・法則の意を表わす。(略)>

●こと【言・事】 [名] <古代社会では口に出したコト(言)は、そのままコト(事実・事柄)を意味したし、またコト(出来事・行為)は、そのままコト(言)として表現されると信じられていた。それで、言と事とは未分化で、両方ともコトという一つの単語で把握された。従って奈良・平安時代のコトの中にも、言の意か事の意か、よく区別できないものがある。しかし、言と事とが観念の中で次第に分離される奈良時代以後に至ると、コト(言)はコトバ、コトノハといわれることが多くなり、コト(事)とは別になった。コト(事)は、人と人、人と物とのかかわり合いによって、時間的に展開・進行する出来事、事件などをいう。時間的に不変の存在をモノという。後世コトとモノとは、形式的に使われるようになって混同する場合も生じて来た>

問題点一：「モノ」＝推移変動の観念を含まない対象、「コト」＝時間的に展開・進行する出来事、事件の原義は上代語において果たして妥当かどうか。

問題点二：仮に問題一について妥当とした場合、現代日本人の意識においてそれが維持されているかどうか。

問題点三：「後世コトとモノとは、形式的に使われるようになって混同する場合も生じて来た」とは如何なることを指して言っているのか？

そして、今ひとつ、上記の辞書的な記述の問題点を指摘すれば、それは、「人間が対象として感知・認識しうるものすべて」が「モノ」とすることが妥当かどうか、ということである。これは奇しくも大槻文彦の『大言海』の「凡ソ形アリテ世ニ成リ立チ、五官ニ触レテ其存在ヲ知ラルベキモノ、及、形ナクトモ吾等ノ心ニテ考ヘ得ラルベキモノヲ総称スル」という記述と軌を一にするものである。

二、現代語の意識において、「モノ」と「コト」を区別することの可能性は如何に？

いったい「モノ」と「コト」の区別は、可能であろうか。もし可能だとしたら、それは品詞分類の次元に属するものなのかどうか。つまり、品詞分類の次元で画定することが可能かどうか。

A ○○というモノは……である

B ××というコトは……である

上記二つの範式への代入可能性に見る現代日本語の語・句 phrase・文：

傾向一：句、文は例外なく B への代入が可能である。

傾向二：名詞およびそれに準ずる語(動詞連用形の名詞的用法、例えば「泳ぎ」、「歩き」、「生まれ」、「死に」等、装定の名詞句、例えば「去る日」、「美しい花」等を含む)の大部分は A に代入可能であるが、しかし A, B の両方に代入可能な名詞類が存在する。

a 敵というモノは……

b 敵というコトは……

a 白い花というモノは……

b 白い花というコトは……

a 人類の死滅というモノは……

b 人類の死滅というコトは……

a, b の違いは、「敵というモノは……という言い方が「敵なるもの」についての一般的な陳述であるのに対して、もう一方の「敵というコトは……」という言い方では、……一語文「敵！」とは必ずしも言えないにせよ——「敵が襲来した」というコト……とか、「あいつが敵だ」というコトは……とか、その都度の文脈における或る文章（ここでは「敵」という詞が意味上の中枢）の省略的表現とでもいうべきものになっている。（略）要するに、〇〇に代入される場合には単なる“名詞類”であるのにひきかえ、××というコトは……という際の××は、意味内容上は（例えば、「<人類が死滅する>というコトは……etc.）文章の述定なのである。」（廣松渉（1975），35 頁）

● 「文章の述定」→「文、又は文の資格を有するもの」

● 「<人類の死滅>というコトは……」と「<人類の死滅というコト>は……」との区別：前者の<人類の死滅>は<人類が死滅する>に相当するが、後者の<人類の死滅というコト>は<人類の死滅というコト>一般を、それ自身が主語的に表わす（廣松渉の表現）。その限りにおいて<人類の死滅というモノ>と同義的になりうる。ここで問題としているのは、「<人類の死滅>というモノは……」と「<人類の死滅>というコトは……」のことである。

表：A・B への代入可能性に見る文・句・語の分布

	A	B	例
文	×	○	「犬は動物である」、「犬が走る」 「犬は強い」、「火事！」、「痛っ！」
句 phrase ①	×	○	「酒に強い」 「速く走る」
句 phrase ②	○	○	「白い花」 「人類の死滅」
名詞①	○	○	「敵」
句 phrase ③	○	×	「美しい花」 「去る日」
名詞②（「モノ名詞」と動詞の連用形の名詞用法）	○	×	「石」 「泳ぎ」、「歩き」、「生まれ」
副詞	○	×	「<おそらく>……」
接続詞	○	×	「<しかし>……」
連体詞	○	×	「<あんな>……」
動詞・助動詞の命令形	○	×	「死ね」、「させろ」
形容詞・形容動詞の連用形の副詞的用法	○	×	「<速く>……」 「<静かに>……」
動詞・形容詞の終止形（助動詞を下接するものを含む）	○	×	「<強い>……」 「<泳ぐ>……」 「<歩かせる>……」

三、結論：

- 「モノ」と「コト」との区別は可能であるが、「モノ」と「コト」との区別は品詞分類に対応しない。
- 「モノ」と「コト」との区別は、時間性によるものではない。したがって、「事象 event」と「コト」との関係もこの帰結によって導かれるであろう。
- 「コト」と「モノ」との区別は「文」と文の資格を有する成分とそれを充たさないものに対応する。

参考文献：

廣松 渉（1975）「物と事との存在的区別——語法を手掛りにしての予備作業——」、『思想』1975年10月号、29-50頁。